
桜が咲く頃

浅野勇心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜が咲く頃

【Zコード】

Z1640F

【作者名】

浅野勇心

【あらすじ】

振り返るといつも彼女の笑顔があつた気がする。単調な毎日を送
る僕には焦燥感だけがしかなかった。そんな時、彼女は僕の前に突
然現れる。眩しそうなくらい彼女は輝いていた。スポットライトを
浴び目標に向かってただひたすら走り続けていく。そんな彼女の背
中を僕はただ見つめることしかできなかつた。

プロローグ 第一話（はじめ）

その日は、ひどい雨だった。

頭のてっぺんから足の先まで、雨に濡れ、全身ぐしゃぐしゃだった。点滅する青信号が視界に入る。いつもなら小走りに渡つてしまふところだが、そんな気力もない。赤信号になつてその場に立ち尽くした。

真夜中で、車の行き来も少なく、人の通りもまばらだった。

「バイバイ・・・」といった彼女の言葉が耳の奥でこだましている。ゆっくりと僕の元から離れていく彼女の足取りを何も言えずにただ見送ることしかできなかつた。

悔しさと、自分に対するどうじよつもないくらいの情けなさで込み上げてくるものを抑えることができず、憚りもなく声を上げてその場にしゃがみこんでしまつた。

「情けねーな

今までの自分だったら、こんな醜態を表す人間を見たらきっと鼻で笑っていたに違いない。

そんな自分も今は所詮こんなものだ。いつの間にか赤信号も青に変わっていた。

バチバチと僕の背中を打ち続ける雨によつて彼女との思い出をすべて洗い流してくれるだろうか。ただそんなことを思った。

今日すべて終わった。彼女をもう一度抱きしめることもできないだろつ・・・。

いつか、僕の知らない他の誰かに抱きしめられることはあるても・・・。

最後に見た彼女の横顔が脳裏に浮かんだ。止めどなく降り続ける雨が一層激しくなった。

1.

明菜と何年かぶりに再会したとき、僕はまったくそれが僕の知っている彼女だとは気付かなかつた。

ある日バイト仲間のアツシから面白い日雇いのバイトがあるからと一緒に1日付き合ってくれないかとせがまれた。

あまり乗り気ではなかつたがアツシに「どうしても頼む」と僕に手を合わせ屈託のない笑顔でお願いしていくので断り切れなかつた。

どちらかといえばとアウトドア派といつよりはインドア派であり、休みの日くらいは家で借りてきたDVDをのんびりと観たい。しかし、結局アツシに付き合わされて高円寺のあるライブハウスにきた。

今日、そこで来月発売予定の有名歌手の新曲PV撮影が行われるら

しへ、僕たちはそのアベニューで見るライブシーンの観客のHキストラというわけだ。

その時ようやくアッシのビッグしてもこの日雇いバイトがやりたかったわけが飲み込めた。

確か最近アッシがしきりと「××つていう新人歌手がいるんだけどその子が気になつてしまふがいい」と熱弁していたことを思い出した。

(2)

薄暗い階段を降りて、色とりどりのポスターが扉や壁のいたるところにびっしり貼りめぐらされていて、正面の扉を開くとすぐに受け付があった。

スタッフらしき男がアツシに「エキストラの方たちですか」と無表情に声をかけた。

「あっ、おおっす、エキストラっす」とキャップをとつて大きな声でペコペコ頭を下げて答えるアツシに、機械的に「ではこちらに名前と住所、電話番号を記入してください」と僕の方もちらりとみて云つた。

感じの悪い奴と思いつつも、アツシがやたらと「テンション上がつてくるわ」と連呼して云つのがおもしろくてしょうがなかつた。

「でもすじくねーか、手島舞のミュージックPVのエキストラだぜ」と云いながら、わりとこじんまりとしたライブハウスで50人も人が入つたら汲々状態ですでに人をかきわけていないと前に進めないとこりを、アツシはずんずんステージ近くに進んでいった。

だいたい、僕はといつとアツシとはまったく対照的で今回この会場で新曲のPV撮影をする手島舞という歌手をほとんど知らないに等しかつた。

ただ何となげわざわざするライブ会場内に今か今かと緊張感に満ちた周りの雰囲気に圧倒されていた。

「で、手島舞つていうのは有名なのか」と僕が横に目を輝かせまりをキヨロキヨロみまわしているアツシに尋ねると、僕の目の前にいるアツシと同じような連中の幾人かが後ろを振り返り冷やかな視線で僕を睨みつけてきた。

アツシも「ヒロ、おまえマジでそんなこと云つてるのかあ、今CMでもラジオでも彼女の曲聞かない日はないぜ」とあきれ顔だった。

「まあ、あんまりテレビも観ないし、ラジオはほとんど聞かないし・・・」と言いつて訳がましくアツシに云うと、チエツ、とわざとらしくアツシは舌打ちをして頭をオーバーに抱えた。

そんなことをしていると時間になつたよつで急に照明が落ち、そしてステージの右端から大きな歓声が上がつた。歓声の方に視線をやるとパツと、ステージの袖からスポットライトがあたつて、手島舞が僕たちに向かつて手を振り現れた。

「やベニー、マジで生の手島舞だぞ、ヤベニー・ヤベニー」と隣で興奮するアツシを見て思わず吹き出してしまった。

「なにがおかしい、どう考へてもこの状況やベニーだら」「ともうアツシは手島舞を食つ入るよつて見つめ」「ヤベニー」としか云つてなかつた。

ライブハウス内もアツシのように今にもステージ上になだれ込んで行きそうなぐらいいの興奮状態で、ステージ上の手島舞が笑顔でその歓声にこたえ、そのとなりでマイクをもつたプロデューサーらしき、わりと大柄で黒のズボンメガネをかけた顔立ちの整つた40代半ばくらいの男が「今から今日、みなさんにやつて頂く流れを説明します」と云つて今日撮影するPVの内容と僕たちがエキストラとして

手島舞が歌う新曲に合わせノリノリに会場の観客として声援を投げかけるように伝えられた。

手島舞に対する僕の第一印象は、「やっぱ芸能人はきれいだな」といつたまったく単純で「ぐく当たり前の印象でしかなかつた。

髪はロングで目元が笑うと愛くるしく印象的で、軽く笑窪ができる。

ジーンズにTシャツといったラフな格好だが、スラッシュとしているが胸の膨らみは結構ある感じでスタイルは良いといったところだ。

僕は彼女が歌う歌声を初めて聞きながらまわりと同じように幾分はずかしさをしのんでノリノリに乗りながらこんな女性と付き合う男性はいったいどんな奴だろうかと、嫉妬まじりに考えながら手島舞の透きとおる歌声にいつの間にか聞き入つていた。

「ヒロも満更じゃなかつたな」とアツシは含み笑いをして軽く肩をあててきた。

「手島舞って結構いけんじやない」と、平静を繕つてわざとそんなに関心もないように云つた。

た。

「どれだけおまえは上から目線なんだよ、てか実際に今超注目されているつちゅーの」とケラケラ笑つた。

「そつか、なるほどね」と云つて僕も一緒になつて笑つた。

ライブハウスを後にする頃、すっかり日も暮れていた。明日は僕だけバイトでアツシは休みだからと、「今日は久しぶりに飲み明かそう」とひどく無頓着なことを云つた。

アツシに言わせれば、今日生の手島舞を見たといつ興奮もさめやま
ずといったところだね。

僕も最悪、飲み明かしてバイトに遅刻したら、いつそのこと体調が
すぐれないと店長に「いつで明田のバイトはやめるかと思つた。

高円寺には東京に出てきでから、今日が初めてでまつたくじに行
つていいか分からずアツシの顔を見てみると、アツシもキヨロキヨ
ロとあたりを見回しているので「お前も高円寺来たことないのか」
と聞くと「当然」と胸を張つて答えた。

しばらぐぶらぶらと歩き回つたあげく、年期の入つてそつ居酒屋
に入った。

居酒屋に入ると数人入つたらもう一杯といつたような造りでママさ
んらしき人が後ろを向いたまま「すいません、今日は貸し切りなの」
と甲高い声でいった。

「あつ。そつすか。残念だなー。ヒロ次いこつ」と僕が中に入ろう
としたところヒロはすでに

に踵を返していた。

「え、何で。」

とアツシをよけて一旦店の中に入ると「せつかく来て下されたのに
『めんなさこね』とママさんがよつやへりを振り返つた。

「あーーー。」

ママさんは僕の顔を見るなり、声を発しじまじと口元を押さえながらじっと僕の顔を食い入るように見つめてきて

「やつぱつ、そうだ、ヒロくんでしょ。」

とママさん自分の名前を呼ばれた瞬間、グルグルと僕の思春回路がめぐらめぐった。

「誰つー?..つ..」

(3)

何でこの人は僕の名前を知っているのだといふと考へてゐる、

「何だ、ヒロ知り合いか」とアシシがママさんと僕の顔をキョロキヨロ見ていた時。

「明菜のおばさんー。」

「さうだせつぱつ、ヒロへさじやないの。どうして、何、今はこいつちここのもの?」

「さうだせつぱつ、ヒロへんじやないの。どうして、何、今はこいつちここのもの?」

振り返えるなりいきなり僕の名前を云つてた着物をきて髪をいぢられいにまとめたその人は、明菜のおばさん。

おばさんと云うか明菜の母親だった。

早瀬明菜。

中学を卒業するまで、僕と明菜は同じマンションの同じ階の隣どうしに住んでいた。

幼稚園から中学3年までの間ずっと同じ学校に通っていた、いわゆる幼馴染だった。

明菜の父親は明菜がまだ幼稚園の年長に上がる前に交通事故でこの世を去り、母親一人で明菜を育てていた。

明菜の母親は夜はスナックで働いて外見は派手だったが、とても気さくできれいな人だつた。

いつも明菜の家を自分の家のように行き来していた僕をとても可愛がってくれた。

そんな訳で明菜の母親が大好きだつた。

自分の母親には絶対秘密にしていたことでも明菜の母親には相談していった。

クラスに好きな女の子ができた時も一番最初に打ち明けたのも明菜の母親にだつた。

中学に上がる前まで明菜はショートカットで身長も低くかつた。

そのくせスポーツはよく出来て女子バスケット部のキャプテンとしてチームを県大会ベスト4に導いた。

そして、クラスの男子からはなぜかモテていた。

僕は明菜のどこがよかつたのかさっぱり理解できなかつたけど、とにかくかわいかつたらしい。

今はどうだかわからないが・・・・。

いや、母親に似ていたといつたら似ていたから彼女と美人になつて
いるに違ひない。

そうであつたとしてもあんまり実感はわかないものだ。

それがやはり僕と明菜との空白の時間の長さに違ひない。

いつも一人一緒に遊んでいたほど仲がよかつたのに・・・。

中学に上がつてからはさすがに周りの人が気になりだし、いつしか
しうつちゅう行き来していた明菜の家にも次第に寄り付かなくなつ
た。

明菜の母親にはたまに学校の帰り道に偶然会つて挨拶を交わす程度
になり、時はそのまま流れた。

中学をまもなく卒業となつた頃、「ヒロ、明菜ちゃんのこと聞いた
?」と母親がスーパーから帰つてくるなりいった。

「なんか明菜ちゃんのお母さんにスーパーでばつたり会つて聞いた
んだけど、近くに東京に引越すんだつてよ・・・」

「ねえつ。聞こてる?」

僕の方をのぞきむよひに母親は、「さみしくなるね」と意味深な
含み笑いをした。

「そりなんだ」

と母親のその意味深な含み笑いの意図を感じとつた僕は素氣なく答

えた。

「見栄張つちやつてやー・・。」「

「はいはい。」とはいつたものの・・・・・・・。

正直をみしかつた。

最近ではろくに会つても話を交わしたりしなかつたけど、やつぱり氣にはなつた。

明菜はあの時僕のことをどう思つていたのだろうか・・・?

僕は・・・・・・。

結局何も詳しいことを本人から伺つこともできず、明菜は東京とうテレビや雑誌でしか知らない未開の地に静かに僕の元から去つて行つた。

その明菜の母親が数年ぶりに僕の目の前に偶然にうして現れたので、さすがにすぐには思い出せなかつた。

「明菜のおばさん

「いやー大きくなつて、おばさんびっくりしちやつた。今は東京に遊びにきていろの?」

「うわー、マジで明菜のおばさんじゃない。」ここで働いているんで
すか?ってこいつよつ僕は今こいつちで一人暮らしていります。」

「こいつほほ笑んだ顔は歳は確かに年齢分、皺刻んでいたが、やつ
ぱり今もきれいだった。

「やうよ、ここは元々私のお兄さんの家だつたんだけど、昨年急に
亡くなつちやつてさ。

おばさん別で働いていたんだけど、頑張つて働いた分ある程度はお
金貯まつたからね。パートとこじを改装して小さいけど店開いてる
のよ。」

「へー。す、じやん。やつぱり明菜のおばさんはやる時は豪快
だなー、昔から・・・。」

明菜のおばさんはアハハつと笑いながら「やつ。おばさんはやる時
は威勢がいいんだから。」

と胸を張つて答えた。

「知り合いか?」

「やーそ声で話しかけられて初めてアツシの存在を思い出した。

「ああ、わりー。地元の幼馴染みのおかあさん」

明菜のおばさんに紹介するような恰好でアツシを前に引つ張り出し、
照れ笑いをするアツシに明菜のおばさんは「どうも、ヒロちゃんが
いつもお世話になつてます」とお辞儀をしてくれた。

そんなこんなでまだ予約の団体が店に来ない間、「ちょっとしかな
いけど、なにかつまんでいきなさい」と明菜のおばさんに促され、
アツシと僕は少しの時間にここにこもることにした。

「ところで、その予約の人たちは何時に来るの?」と僕の質問に。
首をひねりながら「うーん。どうかしら……時間がいつも読
めないのよね。色々とあるみたいで……。」明菜のおばさんは
返事を返した。

時間が読めない客なんて、どんな客だろうかと?マークを頭に浮か
べながらとりあえずゆっくりしていこうと僕はタバコに火をつけた。
明菜のおばさんとこうして面と向かって話をするのは数年ぶりにな
るが、あっという間に打ち解けてしまった。

なんていうのだろうか……、時が過去に向かってタイムスリッ
プしたみたいに昔の感覚に戻つていった。

深い安堵感と懐かしい雰囲気が僕のまわりに立ちこめた。

しかし、心の中である一つの質問だけが、決して僕の口を割つて出
てこない。

出でこないといつより、アツシのいる手前この質問をしたら確実に
突っ込まれることだけは確かであたから……。

明菜のおばさんも僕のその空気を察してか決してその本題には入ろ
うとしなかった。

1時間くらい経つた頃だろうか。そろそろ予約の客も来そうな感じがしたので、カウンター下のアッシの足をこぎました。

「痛てエーな。なんだよー」とふくれつづらにアッシが僕の方を向いた瞬間、外が急に騒がしくなつてガラガラッと扉が開いた。

「おかあーさん、『めエーン!...だいぶ遅くなつちやつたよー!』

若い女性の声とともに、複数の声が勢いよく一斉になだれ込んでくるように入ってきた。

「あれ、今日は貸し切りじゃなかつたっけ?」

と暖簾をぐぐりながら笑い皺をいっぱいついたいかにも人のよさそうな、そのてんびしつとしたスーツ姿に、髪を後ろに流した短髪で歳は40後半といったところの男が僕とアッシを見て、明菜のおばさんに声をかけた。

「じゃあ。やるやう・・・」と云つて、明菜のおばさんに田代命図して、僕はアッシの腕をとり早々に店から引き上げようとした。

「あつ」

とアッシは扉の方を見て口を開いたまま僕の腕を逆に引っ張り返した。
「なんだよ?」とアッシが引っ張り返してきた反動で少しありめいた。

僕は何気なくアツシの視線の方に目をやると、そこにはさつき眩しいくらいのスポットライトを浴びてステージ上で歌っていた手島舞が僕の方をじっと見つめて立っていた。

「ヒロ……!？」

「…………?？」

彼女の口から僕の名前がなんで出てきたのか、一瞬理解できなかつた。

明菜のおばさんの顔を見上げると、にっこり笑って僕と彼女のこの異様な空間をいかにも楽しんでいるかのように見ていた。

アツシははといと・・・・・なるほど、手島舞を凝視して完全に固まっていた。

つまり・・・・・手島舞が・・・・。

明菜のおばさんが彼女に声をかけた。

「明菜、今日は偶然ヒロちゃんがうちひよっこひよっこ顔を出してくれたのよ」と。

・・・・・早瀬明菜で・・・・・

早瀬明菜が・・・・・手島舞・・・・・といふことば・・・・

僕が今日、ステージ上で芸能人はやつぱりきれいだな、なんて口メ

ントしていたのは
すっかり大人びてきれいになつた明菜に対していつたコメントとい
うことだ。

「・・・・・！」

「明菜だつたのかよ」

僕の第一声だつた。

(4)

2.

扇風機からなまぬるい風が流れてきて、余計に暑さを増長させてい
る気がしてならない。

近くの図書館について、クーラーの効いている部屋でレポートを仕
上げるといつてもなんだか行くのが面倒で結局自分の家にいた。

タオルを頭に巻いて「やつだつた！」と、

冷凍庫から、キンキンに冷やしておいた冷えピタを取り出しおでこ
に貼った。

幾分涼しくなった気はしたがすぐにそんな感覚は消えてしまった。

本当に暑い日が続いて困ってしまう。

バイトは今週休みをもらってきてるし、とはいつても真面目にレポー
トを仕上げる氣にもなれない。

暇だ。

「あ～あ～」と深いため息まじりにそのまま仰向けになつて寝ころ
んだ。

網戸越しに、蝉の合唱が繰り広げられている。

あれから2ヶ月が過ぎた。

携帯のカーソルを明菜の番号に合わせる。

早瀬明菜。 090 - × × × × - ○

文字を何度も目でなぞりながら、また深いため息をついた。

ほりきりこってなにも考える」とはできない。

かなりの衝撃を受けたのはいつまでもない。

何か衝撃が二つ

悪い意味とは決していぢりなし

2週間前　舟島舞をし早瀬昭葉を抱いた

「ほり・・・・・」
縁はれた?といつておひが

暗がりの中だつたが、月の光がかすかにカー テン越しに光をこぼし、明菜の裸体をうつすらと照らしだしていた。

思つたよりも胸の膨らみが大きく、彼女のそれに軽く触れたとき、
ぴくっと彼女は後ろに引くしぐさをとつた。

肌も透き通るようにならぬ、それでいて、子供の頃の擦り傷をいつぱいつくつて僕と一緒に遊びまわっていた頃など想像すらつかないほど、明菜はきれいだった。

終始無言のまま、明菜は僕のコードに従いつつ、甘い吐息だけが僕の耳もとでこぼれあちていた。

一つにならじとお互いの時間の空白を一気に埋めていくような気がした。

よく時間がこのまま止めればいいことこうへやセリフがあるが、そのときは本氣でそう思った。

「」のまま時間が止まってしまえばいいこと……。

・・・・今思えば、もしあの時明菜と再会することができなければ、どんなにお互いにとつて幸せだったことだらうか。

お互いに思い出のまま、大切な存在のままの方がむしろよかつたかもしれない・・・・。

今更、何をいつてもしようがないのは知っているはずだが、後悔の念しかない・・・・。

彼女との日の晩別れてから、明菜からは2週間過ぎても電話もメールも何も連絡がなかつた。

打ち切り報告

短い間でしたが、筆者の小説を世に提示するにまだ熟考する必要があることを痛感し、この小説を打ち切ることに致しました。

数少ない読者の方々一読頂き大変光栄に思います。

3日間打ち切りのコメントを載せた後【桜が咲く頃】を削除致します。

筆者のひとり言

「19歳の頃、青春を謳歌するどころか、目の前が真っ暗で現実との葛藤の中で人生への活路を真剣に探しとまよっていた。

辛かった。

自分よりもっと不幸な人が当然世の中にはいろいろいただろうが、未熟な自分には全てが真っ黒に思えた。

何度も人生を悲観してまわりに助けを求めたことか・・・。

肉体的にも精神的にぐちゃぐちゃだった。

辛かった。

でも何とか生き抜いた。

後悔も何度もした。

過去に何度も振り回された。

でも何とか生き抜いた。

22歳の頃、筆者の血縁がいなくなつた。

今もいないままだ。

いつたいどこで何をしているのだろうか？

筆者にとつてはとても大切な存在だった。

心の支えの一部であつたことが時間が経つにつれはっきりしてきた。

後悔していることは確かで、時々無償でどうこうせなくなる。

元気でやつていますか・・・。」

浅野勇心

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640f/>

桜が咲く頃

2010年10月28日08時21分発行